

## 愛知用水通水から 60 周年 「木曾川さん」ありがとう

### ～森は水の源、水は命の源、川は命のつながり～

1961年9月30日に愛知用水が完成し、通水を開始して、今年で60年になります。木曾川の水は、岐阜県八百津町にある兼山取水口から愛知用水の“水の旅”が始まります。岐阜県可児市、愛知県犬山市、小牧市、春日井市、瀬戸市、尾張旭市、長久手市、日進市、そして中間地点にあたる調整機能を持った東郷町にある愛知池に流れ込んできます。ここまでは、多くがトンネルで用水の流れが見えません。しかし尾張東部浄水場がある愛知池からは、愛知用水の水の流れを見ることが出来ます。

愛知池から木曾川の“水の旅”は続きます。豊明市、大府市、上野浄水場がある東海市、知多浄水場や佐布里池がある知多市、常滑市、そして美浜町にある美浜調整池までの幹線水路112kmを流れてきます。愛知用水には幹線から分岐した農業用水の支線水路の総延長が1,012kmあります。

美浜調整池から更に知多半島を南下して、南知多町師崎から海底の管を通して、篠島、日間賀島や佐久島の島々に木曾川の水を供給しています。これらの流域では、木曾川の水が愛知用水を通して、日常生活水、工業用水、農業用水に利用されて、60年になろうとしています。

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」を合言葉に木曾川・飛騨川・愛知用水の上下流交流・連携を一層進めていきましょう。「森は川の源、川は生命（いのち）の源、川は、生命のつながり」です。

木曾川の上流域から下流域の4人の方々に、その恵みの歴史や現状、課題などについて、ご意見やご感想、ご提案を書きいただきました。

### 「愛知用水を通じて水を育む<sup>もり</sup> 森林に還る」

牧尾ダムは、水不足に悩まされていた岐阜県から愛知県の尾張東部の平野及び知多半島一帯に、水を供給する愛知用水の水源施設として、王滝村と木曾町三岳（三岳村）に造られています。長野県の南西部木曾郡に位置し、木曾御嶽山の南山麓に広がる王滝村は、木曾ヒノキをはじめとした美しい森林に覆われた山々に囲まれ、面積の9割以上を森林が占めています。この森林に育まれた水が愛知用水の水源となっています。王滝村では、水源涵養や水土保持など森林の公益的機能を発揮させるため、ボランティアを募り長野県西部地震などによる荒れ地の緑化に努め、豊かな森林『緑のダム』である森づくりを推進しています。また、



牧尾ダム（1961年完成）

昭和の時代からいち早く下水整備（普及率 97%）を進め水源の環境保全に取り組んでいます。

愛知用水・牧尾ダムが完成し、通水を始めて 60 年、1961 年（昭和 36 年）生まれの私と同じく還暦を迎えます。還暦とは、干支・十干の組み合わせが 60 年で一巡することから、「元の暦に還る」意味から、還暦は生まれ直しと考えられ、人生のひとつの区切りとされています。木曾川流域の交流連携のこれからは、持続可能な社会の担い手である子供たちのチカラ“探求力”が不可欠だと思います。その“探求力”を育むプログラムを木曾谷の雄大な森林・自然と愛知用水・牧尾ダムの歴史・役割の学習・体験を通して提供したいと考えています。

2021 年以降本格実施される新学習指導要領では、今までの観光中心から、「主体的・対話的で深い学び」として課題発見・問題解決型学習など重視されています。また「未来をつくるために学ぶ」「未来をつくるために働く」という考え方を教えるために、SDGs の目標や取り組みを関連付けた質の高い教育プログラムが求められています。（一社）木曾おんたけ観光局（木曾町と王滝村の DMO）では、新学習指導要領と SDGs を結び付けた探求型の旅行プログラム、特に SDGs の「4. 質の高い教育をみんなに」を基盤とし、目的として①視野を広げる。②知識を深める。（事前学習・現地学習・事後学習の学習との組み合わせ）③共通課題を発見し関連づける。3つを掲げ、児童・生徒が「本物の現実」に触れることができる体験プログラムを企画し、「木曾川流域みんなの会」のみなさまとともに、持続可能な社会づくりを目指していきたいと思っています。

一般社団法人木曾おんたけ観光局 丸山 文広（王滝村職員）

## 母なる木曾川から恵みの水を受けて 60 周年の知多半島から

### 川つながり、上流からの恵みがなければ下流は生きていけない

愛知県とりわけ尾張地方の発展は、歴史的にも母なる川、木曾川に支えられてきた。古くは木材の産地として、大正から昭和にかけては電源開発、そして戦後の 1961 年には名古屋の東部丘陵を通過して知多半島に農業用水、工業用水、水道水を供給する愛知用水が建設された。天水とため池に頼らざるを得なかった農業事情は一変した。臨海部には巨大な臨海工業地帯ができた。水道水は、井戸水に頼っていた家庭に質量共に安定した水を供給し、名古屋圏の人口増加を支えた。

ところが今、知多半島の南部の自治体では人口減少が進んでいる。日本全国ではすでに人口減少は明らかなことであり、都市近郊の知多半島北部でも、事情は同じで、早いか遅いかの違いだけである。人口減が悪のと言われるが、もうそれは避けがたいものとして受け入れていく必要がある。むしろ大事なものは、それを前提としてどんな社会を描けるかだと思う。

これまで、昭和の時代、我々はがむしゃらにインフラを造り続けてきた。これからは維持管理が大変なことになるだろう。ダムや灌漑施設もこれから如何に上手に維持管理をして、末永く有効に使っていくかが課題となる。愛知用水幹線の二期工事は終わったが、支線や末端管路の維持修繕や耐震化が課題となっている。

上水道に関しては、1994 年の大渇水以来、大きな水不足は起きていない。また、急激な人口増加が止まって、節水も進んできたことから、水道水の需要は減り始めている。一つ残念なことは、木曾川の美味しい水が飲めなくなったことだ。木曾川の水はうまい。そして、如何に清流といえども長良川の河口



御嶽山山頂にて（2010 年 7 月）

の水は木曾川の中流の水に比べれば水質が劣る。知多浄水場の入口までは岐阜県八百津町の兼山で取った愛知用水の水が届いているのだから、これを飲料水に供給すべきだ。愛知用水の3ダムを運用した木曾川の水でかなりのところまで対応可能だろうし、対応しきれないときは、河口堰の水を農業用水や工業用水に使うようにすれば良い。これは、運用のソフトでなんとでもなる話だと思う。

上流と下流の関係は、日頃強く意識していないかも知れないが、我々は上流からいただいた水で生活していることは紛れもない事実である。定住しているわけではないし、定期的な交流があるわけでもないが、何らかの関わりと想いを持つ「関係人口」という言葉がある。生態系や地球のエコシステムがまさにそうであるように、上流からの恵みがなければ下流は生きていけない。川つながりであることを互いに誇りに思い、共にご縁を大切にしていきたいものだ。

神谷 明彦 (知多郡東浦町長)

## 『産業用水から地域用水に。先人の思いを後世に』

愛知用水通水60周年、おめでとうございます。愛知池の近くに住む者として、豊富に水が使えることに深く感謝します。

用水の中流地域にある愛知池は独立行政法人水資源機構「愛知用水総合管理所」が、池を地域に開放するという方針で、池の周りを囲む日進市、東郷町、みよし市の市民がウォーキングをしたりマラソンをしたりと、日々親しんでいます。

そして、産業用水を地域用水にしようと頑張っ  
てこられた民間人もいました。かつてはコンサル  
として愛知用水工事に関わってこられたYさん。  
池周辺の植物に詳しいMさん。池のほとりに喫茶  
店兼ホールを建てたTさん。3人とも鬼籍に入り、  
彼らの愛知用水に感謝する気持ちをいかに後世  
に繋いでいくのか——。これが残された我々の課  
題です。

市民団体「愛知池友の会」は、池周辺の清掃活  
動だけでなく一面を借りてフジバカマを植え、ア  
サギマダラという渡蝶が飛来する庭「バタフライガーデン」を作り、愛知池を歩く人に癒しを与えてい  
ます。愛知用水のキャッチフレーズ「水とともに文化を育む愛知用水」。まさに実践しています。

そして、「官」の立場からも、水の大切さに感謝する仕組みを先人の政治家が整えてくれています。豊  
明市、日進市、みよし市、長久手市そして東郷町の4市1町は水道企業団を形成し、圏域約32万市民に  
上水道を供給しているのですが、2001年(平成13年)から水道料金に、「使用量1トンあたり1円」を  
上乗せして基金に積み立てているのです。1年間に市民が水道料金の「上乗せ分」として支払っている金  
額は3,000万円余で、木曾川上流の間伐事業に使われています。

さらに、行政としても日進市は木祖村、長久手市は南木曾町、みよし市は木曾町、豊明市は上松町、  
そして東郷町は王滝村と友好自治体として絆を結び独自に交流を続けています。

私は議会で「愛知池を開放すると決めた先人の覚悟に応えるべき、日進市も愛知池をもっと利用しよ  
う」と訴え、市主催の「駅伝大会」が2018年から実施されています。

目的や手段はさまざまでも、地域全体で水の大切さを考え、愛知用水を今後も支え上流への感謝の念  
を後世に伝えていきたいです。

(日進市・市議 山根 みちよ)



愛知池周辺の清掃活動

## 『当たり前』を継続するために、農地と愛知用水の保全是表裏一体

愛知用水通水 60 年おめでとうございます。

下流域にて恩恵を受ける農家を代表し、改めて今この農地で当たり前に農業用水が使えることに感謝申し上げます。

この『当たり前』は、この地域における先人たちの期待を一身に背負った愛知用水事業に従事された先人の方々のご尽力により『当たり前』になり、木曾川水系の周辺地域の方々による絶え間ない環境保持のご尽力により、継続していることです。

今年の 10 月で、私が地元の愛知県知多郡美浜町に戻って丸 5 年が経ちます。

30 歳まで大阪でサラリーマンを 7 年過ごし、2016 年 10 月に生まれ故郷の実家、杉浦農園に就農しました。戻った当初は愛知用水の「あ」の字も知らぬ状態でした。

そんな私も翌年の田植えの時期から愛知用水の有難さを常に意識しながら農業に従事する日々が始まります。愛知用水では 5 月 1 日以降に水稻用の農業用水の配水が始まるため、田んぼの給水用バルブをひねれば、すぐに水を利用できる環境が整います。愛知用水の賦課金さえ支払えば、年間通して米作りに必要な水を利用することができます。この仕組みのおかげで杉浦農園を含めた知多半島の米農家は米作りを行うことができます。

ただ、最近その当たり前の米作りができない農地が出てきています。

私が戻った翌年から父に代わり、愛知用水の布土地区の管理班役員の役を頂き、3 年にわたり従事していますが、土地改良事業より数十年経った愛知用水の配管は僻地の分線から老朽化が進み、所々で諸々の原因で漏水が多発しているのです。土地改良区的主要エリアにおいては漏水後の工事ですぐに復旧するのですが、山間部の果樹畑の分線などはいくつかバルブをひねっても水が出ないエリアが出てきています。



収穫した稲穂を手に杉浦大地さん(左)と剛さん



美浜調整池

れています。

下流域における担い手の一人として何をしていけるか、どうしたらこの素晴らしい『当たり前』を守っていけるか。私は今、その責任の重さを強く感じると同時に、独りではなく周囲の仲間と共に切り開いていく、やりがいと喜びを感じながら農業に勤しんでいます。

(美浜町・農業 杉浦 大地)

## 味噌の天地返し～名古屋生活クラブスタッフとみん・みん楽作隊で実施～

7月31日、木曾町の木曾駒高原にある小池糶店の味噌蔵にて、味噌の天地返しを行いました。味噌蔵には、名古屋生活クラブのスタッフが研修を兼ねて20名参加、「みん・みん楽作隊」の参加者とともに4つの樽の天地返しを行いました。



もちろん、我がみん・みんの会の味噌「みなもと」の天地返しも行いました。途中、雷と夕立に見舞われ、テントの上に溜まった雨水降ろしや片付けにテンヤワンヤ。

天地返しの作業の現場に「市民タイムス」や「中日新聞」の記者が取材に訪れて、伝統的な味噌づくりの話を熱心に聞き入っていました。

その日は「高原荘」にて宿泊し、翌日は名古屋生活クラブのスタッフは研修のつづきを、「楽作隊」の参加者は大豆畑の草取りを行いました。

昼間は真夏の日射しですが、木祖村・高原荘の夜は涼しく布団をかぶって寝るほどでした。



皆さんの参加をお待ちしております！

8月28、29日には草取りと赤かぶの種まきを行います。枝豆の収穫も同時に行う予定です。（こんどう）

## 木曾音楽祭（8月26～29日）

残念ながら今年の第47回木曾音楽祭は中止になりました

「コロナ」の全国的な感染拡大や8月半ばの大雨による民家への被害、そして中央本線における木曾郡での線路被害による不通などで、残念ながら今年の第47回木曾音楽祭は中止になりました（8月20日発表）。

第47回木曾音楽祭が今年は、前夜祭が8月26日（木）、27日（金）から29日（日）の3日間は木曾駒高原にある木曾文化公園文化ホールで開催される予定でした。今では日本全国様々なところで音楽祭が行われていますが、最も歴史のあるクラシックの音楽祭です。日本の一流プレイヤーが1週間前より木曾の集まり、町民などのボランティアが作る食事を共にして同じ木曾の空気を吸いながら最高のアンサンブルを創っていきます。

昨年はコロナの影響で開催することが出来なくて、今年は万全な対策を取りながら開催することが決定。電話予約等のチケット発売が始まると「昨年は聴けなくて残念でした」とか「待っていたのよ」等、お客様の生の声を聴けたと事務局からの報告があり、実行委員会も励まされました。

このような準備が積み重ねられてきましたが、中止にせざるを得ないことになってしまいました。

来年夏に、きれいな空気を吸いながら日本最高のアンサンブルを聴きに、木曾音楽祭へいらして下さい。（小池糶店 唐沢）

## 木曾の手仕事市の開催（9月4、5日）

第14回木曾の手仕事市が9月4日（土）、5日（日）に木曾町内で行われます。音楽祭同様、昨年は開催できませんでした。以前は音楽祭と同会場同日開催で行っていたのですが、8年前から町の中のにぎわいを目的に町内の空き店舗や駐車場、道路（歩行者天国）等を使って開催するようになりました。年々来場者が増えて、音楽祭と同日に開催することが難しくなってきた、今年から1週間ずらして開催することになりました。

今年はコロナ感染対策で長野県内の「クラフトづくりの人びと」に限定して出展店舗も60店で行います（前は190店）。逆にゆったり気分で見つくりと作品を見ていただけたと思います。木曾町内を散策しながら「クラフトづくりの人びと」の手仕事の楽しんで下さい。（小池糰店 唐沢）

## 書評 『つれづれなるままに－「環境情報」“しあわせレポート”より』

著者・四方八洲男さん(京都府綾部市元市長)

みん・みんの会発足の契機となった「水源の里」条例を全国で初めて制定した、京都府の元綾部市長・四方八洲男さんが、はじめて本を出しました。四方さんが『環境情報』に寄稿されてきたコラム“しあわせレポート”のうち、2018年1月～2021年4月分を今回1冊の本として、このコロナ禍のなか、つれづれなるままにお読みくださいということで出版された新書版の手頃な本です。

上流域に取り残された限界集落を水源の里と呼び換え、「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」というキャッチフレーズをつくり、「全国水源の里連絡協議会」の結成まで一気に活気づけてきたこの四方さんの原動力は何だったのでしょうか。

結構波乱の人生であった、とこの本のはじめに書かれています。38歳で故郷の綾部市の市議となり、その後議会活動を続け、市長職等を経る中で、四方さん特有の正義感、ひらめきが働いて、その活動の対象はまさに波乱に富み、相対したなかには、私たちの意表を突く人びとが次々と登場します。

勿論、みん・みんの会の活動についても、コラムに書かれていて、みん・みんの会の紹介と河崎代表の寄稿も本の中に載っています。

読むほどに、つれづれどころではなくなる活気にあふれた内容の読みやすい小型の本です。ご希望の方は事務局にご連絡ください。限定30部で、郵送実費をお願いします。

(水原 博子)

### ☆☆☆第12期木曾川流域

### 水源の里基金へ募金の

### ご協力をお願いします☆☆☆

<郵便振込口座>

口座番号； 00810-1-158556

加入者名； みん・みんの会

(水源の里基金と記してください)

水源の里を守ろう

木曾川流域みん・みんの会

☆共同代表☆

河崎典夫、伊澤眞一（名古屋生活クラブ）

☆顧問： 斎藤まこと（名古屋市議）

山根みちよ（日進市議）

☆連絡先☆ 〒464-0075

名古屋市千種区内山3-7-11 斎藤事務所気付

TEL 052(745)1001 FAX 052(741)2588

HP: <http://www.kisogawaminmin1.net/>

e-mail: [suigennosato@gmail.com](mailto:suigennosato@gmail.com)